



こだち News

巻頭言

心理臨床の居場所

姫島源太郎（NPO法人 九州大学こころとそだちの相談室）

・北山修先生 公開事例検討 会のご報告	2
・マツダ財団 より研究助成 金が授与され ました ・歴史的名著 を読む	3
・こだちから のお知らせ	4

理事長：
黒木俊秀
顧問：
田嶋誠一
事務局長：
中村俊夫
相談室長：
増田健太郎
心理臨床部長：
山口雄介
事務局員：
香野有咲
高橋大樹
柳 裕哉
山室香理
準事務局員：
田中将司
田原知子
牧山翔子

（五十音順）

この数年、被災地派遣カウンセラーとして大規模な自然災害に見舞われた地域に行き、臨床活動をする機会を得ることが増えました。被災地では主にスクールカウンセラーとして学校に赴き、臨時ながらもできるだけ現地のニーズにかなうような活動となるよう取り組んできました。

被災地に行くと、果たして現地の方の役に立てるのか、臨床心理士に何ができるのかということに迷いながら活動しますが、その迷いの一方でわれわれにできることやすべきことは山ほどあるはずだ、とも思います。大規模災害への支援は長期化が必至ですが、回復のプロセスは人それぞれなので、気丈にがんばっていたものの後になって疲れが出てしまう方や、変わっていく周囲についていけず、取り残されたようになってしまう方など一様ではありません。支援者として活躍していた方がバーンアウトして人一倍の苦勞を抱えてしまうこともあります。そのような一人ひとりにできるだけ添えるようになると、すべきことはたくさんありますし、できるだけ継続して、じっくりと関わるのが本当に大切だと思います。

しかし、具体的に何ができるのかとなると、現地に行くほうも、受け入れるほうもいまひとつ定かでないということがないように感じられます。もちろん力量の問題はあるでしょう。しかしそれ以前に、医師であればケガや病気の治療ができるように、警察官であれば治安を守ることができるように、臨床心理士であれば何ができるのかということが地域にあまり浸透していないように思われるのです。そのことが知られていないがために、被災地に行っても“何をしてもらえばいいかわからない”という状況を引き起こしてしまうのではないのでしょうか。

「こだち」は、福岡市西新に根を降ろして10年になります。さまざまな経営課題はありますが、この間継続して来談されている方もいらっしゃる、近隣の医療機関や学校などからの紹介も少なからずあります。こだちゼミナールや各種の研修会などには多数の方にお越しいただいています。臨床心理士は今では多くの学校や病院に勤務していますが、自分たちの住む地域の中に相談室があるということを知る方々は全国的に見てもおそらくそう多くはないでしょう。利用するしないにかかわらず、臨床心理士の存在が地域に知られ、「困った時は相談に行けるらしい」という認識をもって受け入れられることがこれからの心理臨床の発展と充実に大きな意味を持つように思います。

そのためにこだちは、まずは確かな仕事を継続し、利用される方の信頼を得ていきたいと思っています。そのうえで活動を開かれたものとし、私たちには何ができるのか、どのような役に立つことが可能なのかを地域に発信しながら、さまざまな方と協働することを積み重ねていきたいと思っています。これから先もこの地に在りつづけ、より深く根ざしていくことが未来の心理臨床のモデルになっていくことを願ってやみません。



当法人設立10周年企画 北山修先生公開事例検討会のご報告

去る2016年12月18日、当法人の設立十周年を記念いたしまして、北山修先生（九州大学名誉教授・白鳳大学副学長）を講師に招いての公開事例検討会を開催いたしました。事例提供は石田哲也先生（久留米大学医学部神経精神医学講座）でした。当日は満員の参加者が固唾を飲んで見守る中、熱のこもった検討会となりました。

例年、当法人では「公開スーパーヴィジョン」と銘打って企画しておりますが、今回は継続ではなく短時間の1回だけで検討をすることについて、精神分析の観点から「事例検討会」と題することとなった経緯がありました。

検討では、患者さんが生きている世界はどのような世界なのか、どのようにして形作られた世界なのか、重要な関係者とのやり取りから紐解いていきました。その中で、患者さんの半生のある種劇的な筋書きの現実と幻想、生と死との間での揺れ動きをたどり、その苦境への理解

を深めていきました。

石田先生のご報告から紡ぎだされる北山先生の連想は会場の参加者にも波及し、熱心な質問がいくつも挙がりました。面接の中に「外部から侵入してくるもの」についてなど、興味深いキーワードにも言及され、それぞれの日頃の臨床場面への想起を大いに掻き立てるものとなりました。

参加者の感想の中に「北山先生と石田先生のやり取りがカウンセリング的」という声が聞かれた通り、石田先生が立ち会っている世界の境界を、一緒に体験するというよりは、北山先生が俯瞰しておられるかのような構図でした。



公開事例検討会の感想 石田哲也先生（久留米大学医学部神経精神医学講座）

この度は貴重な事例検討の機会を与您えいただきありがとうございました。北山先生をはじめ、黒木先生、こだちの皆様、フロアの皆様に抱えられているような感覚になり、半分は緊張しながら、半分は安心して感じていることを表現することができたように思います。多くのご示唆をいただきましたので、検討の場で体験した感覚をこれからの臨床に活かしていきたいと思っています。

第11回定時総会および特別企画講演会のお知らせ

第11回定時総会

日時：2017年5月28日（日）11時から11時45分

場所：九州大学西新プラザ 大会議室

第11回定時総会特別企画 青木省三先生特別講演会

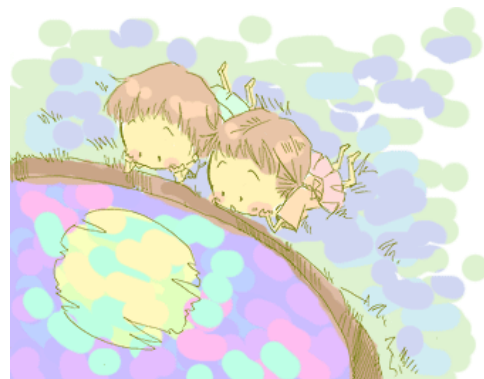
日時：2017年5月28日（日）13時から14時30分

場所：九州大学西新プラザ 大会議室

講師：青木省三先生（川崎医科大学精神科学教室教授）

演題：発達障害をもつ青年・成人への心理療法を考える

※詳細につきましては、同封のチラシをご参照ください。



公益財団法人マツダ財団より 研究助成金が授与されました

公益財団法人マツダ財団は、青少年健全育成や科学技術振興に関して研究助成を行っております。その2016年度の募集にあたり、当法人より「発達障害を有する児童生徒に対する家庭学習支援における効果的な支援方法の開発」を題目として助成金（70万円）が授与されました。

9月に広島のマツダ財団より明木英昌さまが当法人まで足を



運んでくださり、授与式が行われました。授与式には専務理事の増田健太郎と心理臨床部長の山口雄介が列席しました。

今回の助成の対象となっているのは、当法人で展開している「家庭学習支援事業」です。学校に行けていない、あるいは集団一斉指導では困難を有する児童生徒に対し、学習支援員を家庭に派遣し、また臨床心理士による定期的な保護者面接を行うことで、それぞれの特性やニーズにあったサービスを展開しています。特に発達障害を有する（あるいは疑われる）子どもに対する支援について取り組んできており、その実績についてまとめることとしております。

連載 歴史的名著を読む～臨床心理学とその周辺～

第3回 「死ぬ瞬間～死とその過程～」 エリザベス・キューブラー＝ロス（1926-2004）
（原題：On Death and Dying）1969年

死が目前に迫った末期患者200人に対してインタビューを行い、彼らの語る「死とその過程」についてまとめた「否認・怒り・取引・抑うつ・受容」の5段階を有名たらしめたのが本書です。各段階について1章ずつを割き、生々しいインタビューが克明に綴られています。

死期が近い患者に話を聞くことは、当初は病院内で猛烈な反発を招きましたが、理解者が増えるにつれ、患者はむしろ積極的に話したがつている・理解してもらいたがつているということが分かってきます。その想いを治療者や支援者が知ることが、「死の過程」を豊かで穏やかにすることにつながります。

死をめぐる体験の大きなトピックとなっているのは、患者は家族や友人などの他の「生と死」を知っていること、そして治療者・支援者もまたいずれ死を迎える、ということです。恵まれない死に方をした（ように思われる）人のことを思うと、自分を脅かそうとしている死というものがいかに恐ろしいか、あるいは自分はそのような恐ろしいものとはいかに無縁で健康な人間であるかを、誰かに訴えずにはいられな

いのです。そして治療者・支援者もまた、自らが死に対して否定的であれば、患者の死の過程を否定し、あるいは死に瀕していることさえも否定してしまいかねません。

患者だけでなく、取り巻く家族や治療者・支援者の「死の受容」についても丁寧に観察されています。本書では病院牧師と呼ばれる宗教職が心理的苦痛を扱う専門職として扱われていますが、彼らでさえも、聖書の一節を読みさえすれば患者は救われる、と当初は考えているくらいがありました。患者も、自らの宗教観（主にキリスト教）に基づいた救済を思い描こうとしますが、どれだけ篤い信仰があっても、治療者・支援者の死への肯定的・積極的な態度無くしては、充実した死を迎えられません。

ターミナルケアにかかわる方だけでなく、窮地にある人を支援する立場にあるすべての人にとって重要な示唆が得られる1冊であると言えます。



掲示板 ～こだちよりお知らせ～

こぶのないラクダ

この本は北山修先生の自伝です。本書には、出演者としての“きたやまおさむ”を精神科医としての“北山修”がながめて精神分析の視点から振り返るという試みが記されています。北山修先生の人生を追体験する物語としての読み方、読者が自分自身を振り返るヒントとしての読み方、精神分析への招待としての読み方など、北山先生ならではの「あれとか、これとか」の読み方ができる一冊です。

「教育と医学」ご購入のご案内

その名の通り、教育と医学のそれぞれの専門分野の著名な研究者・実践者によって、時流に則ったホットな話題が毎号提供されています。

2016年12月号（762号）では、「震災に遭った子どものケア」について扱い、当法人理事の姫島源太郎が東北・熊本に赴いて行ったスクールカウンセラーの活動について綴っています。

お問い合わせは、教育と医学の会または慶應義塾大学出版会まで。

家庭学習支援サービスのご案内

こだちでは、学校に行けず学習が遅れていたり、一般の学習塾や家庭教師では難しい特徴を持っていたりするお子さんを対象とした学習支援サービスを行っております。保護者の方からのお申込みの後、こだちにて臨床心理士がご様子やご要望についてお聞きした上で、臨床心理学を専攻する大学院生を各ご家庭に派遣いたします。その後も定期的な保護者面接によって、細かなニーズや難しさなどについて寄り添っていきけるようにサポートしております。

ご家庭では、必ずしもすべての時間を学習にあてるわけではなく、狭くながちな対人コミュニケーションの促進やリラックスできる時間の創出など、お子さんに合わせて展開いたします。

詳しくは、こだち事務局までお電話ください。



Facebookページにてこだちの活動情報を配信しております。アカウントをお持ちの方は、ページに「いいね！」をすると、随時情報を見ることができます。こちらのQRコードからもアクセスできますので、どうぞご覧ください。 <https://www.facebook.com/npokodachi/>



○入会のご案内

こだちは今年度で10年目を迎えます。地域に定着した心理臨床サービスを継続するには、収支の安定が求められます。NPO法人の会員となって私たちの活動を支えていただけると幸いです。会員になっていただける方はぜひこだちまでご連絡ください。なお、**会費は1年毎の更新制です**。よろしくお願いいたします。

○ご支援のお願い

当NPO法人では会員以外の方にも、賛助会員としてご入会いただける方や寄付をお願いできる方を募集しております。ご関心やご興味をもたれた方はぜひご連絡ください。

編集後記

「月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり（奥の細道／松尾芭蕉）」の通り、目まぐるしくも淡々と1年が過ぎました。「われ存ずということが不断の驚きであるのが人生である（迷える小鳥／タゴール）」。「新たな時と出会いに乾杯を。（柳）」



特定非営利活動法人 九州大学こころとそだちの相談室

〒814-0002

福岡市早良区西新2-16-23 九州大学西新プラザ内 産学交流棟

TEL 092-832-1345

FAX 092-832-1346

HP <http://kodachi.or.jp/>